今週の為替相場見通し（2021年8月2日）

総括表		先週の値動き				今週の予想レンジ		
		注	レンジ		終値			
米ドル	（円）		109.37	～	109.69	109.00	～	110.70
ユーロ	（ドル）		1.1764	～	1.1867	1.1750	～	1.1900
（1ユーロ=）	（円）		129.55	～	130.13	128.50	～	131.00
英ポンド	（ドル）		1.3737	～	1.3896	1.3800	～	1.3980
（1英ポンド=）	（円）	＊	151.41	～	151.59	151.20	～	153.40
豪ドル	（ドル）		0.7317	～	0.7347	0.7200	～	0.7400
（1豪ドル=）	（円）	＊	80.45	～	80.56	79.50	～	81.50

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、＊印の項目はブルームバーグ。

1．米ドル

金融市場部　グローバルFIチーム　木村　優太

（1）今週の予想レンジ：　109.00　～　110.70　円

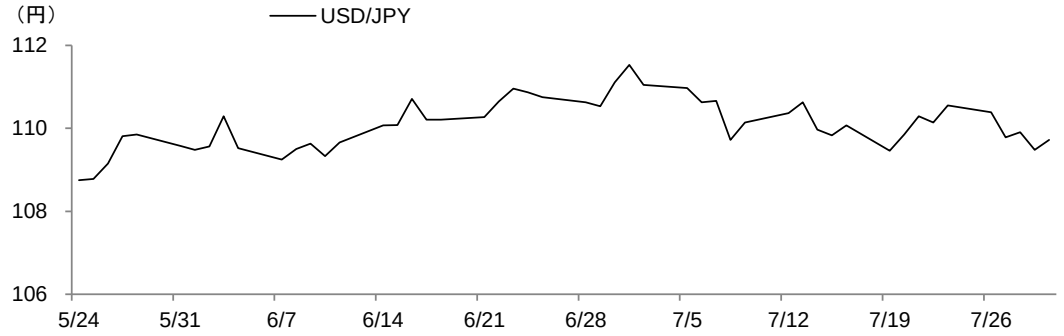
（2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は軟調に推移。週初26日は110.55円でスタート。オープンして間もなく週高値の110.58円をつけるも、東京の連休明けの本邦勢の売りフローや、中国株が下落する動きにからドル売りの勢いが強まり、110円前半まで下落。27日は東京時間は小動きとなっていたものの、欧州時間に中国株の続落が欧州株に波及したことでリスクオフのドル売りが進行し、109円台を示現。米7月消費者信頼感指数が予想を上回り一旦110円台に戻すも、FOMCを前に調整の動きもあってか再び109.60円近くまで下落する。28日は中国株下落の一服やFOMCを控えての米金利の上昇から110円台に戻す。注目されたFOMCは「経済は雇用の最大化と物価の安定化に向けて進展した」と一部声明文が変更され、量的緩和縮小期待の高まりから110.29円まで上昇したが、パウエルFRB議長の記者会見にて以前の議会証言からスタンスは変わっていないことが示され、ドル/円は再び109円後半まで下落。29日も軟調推移が継続。海外時間には米第2四半期GDPと米新規失業保険申請件数、さらに米6月中古住宅住宅販売契約も軟調な結果であったため、再度下落し109.40円近くまで下落。30日は日本での緊急事態宣言の期間延長や対象地域の拡大が嫌気されて日経平均が大幅下落し、ドル/円も週安値の109.37円をつけるも、その後は月末の本邦勢の買いフローにも支えられじり高の展開に。海外時間にはクロス円の上昇にもサポートされ上昇するも、月末の積極的な取引は手控えられ、109.69円での越週となった。

今週のドル/円は米7月雇用統計の発表を控えて動意の薄い展開。先週のFOMC後のパウエルFRB議長の会見では、労働市場が改善していることには触れながらも、目標には程遠いという見解を示したため、量的緩和縮小観測が後退した形となった。このことから、議論が開始されている債券購入プログラムの縮小開始の議論には労働市場に関する経済指標の結果が材料視されることが考えられる。今週発表される重要な経済指標は8/2(月)に米7月ISM製造業景況指数、8/4(水)に7月ISM非製造業景気指数、8/6(金)に米7月雇用統計を予定している。それぞれの結果を受けて思惑から上下することが予想されるも、パウエル議長は労働市場の回復を確認にはある程度時間を要するとしているので、大きな反応にはなりにくい。また、デルタ株の感染拡大や量的緩和縮小の期待後退による米金利の縮小の動きがあった7月にも108円台は示現しなかったことから、現在の金利水準では109円前半が下値の目安になっていると考えられ、上昇の場合の方が比較的方向感はでやすいと予想する。

（3）先週までの相場の推移

先週（7/26～7/30）の値動き：　安値　109.37　円　高値　110.58　円　終値　109.69　円



（資料）ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部　為替営業第二チーム　上遠野　暁洋

(1)今週の予想レンジ:　1.1750　～　1.1900　　128.50　～　131.00　円

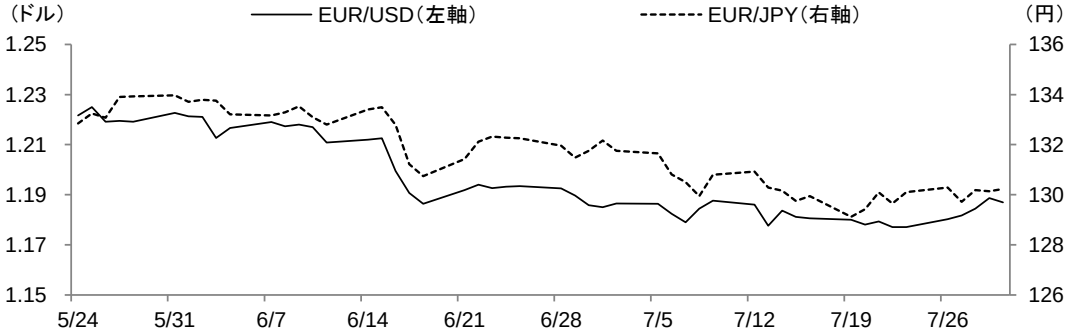
(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半にかけて上昇する展開。週初1.1770付近でオープンしたユーロ/ドルは独7月Ifo景況感指数が市場予想を下回ったことなどから一時週安値の1.1764まで下落するも、売り一巡後はドルの軟調地合いを背景に1.18台前半まで反発。ユーロ円は一時129円半ばまで下落後、130円台まで戻す展開。27日は中国株の急落に端を発する連日の株式市場の軟調さやリスク回避の円買い圧力に押されたが、FOMCを控えた思惑からか米長期金利の急低下にドル売りが強まり、1.18台半ばまで値を戻した。28日は序盤1.18台前半での小動きとなるも、FOMC後のパウエルFRB議長のハト派発言が材料視され、ドル売りの勢いが強まると、1.18台半ばまで上昇。ユーロ/円は概ね130円を挟んでの小幅値動き。29日は米2Q GDPが市場予想弱い結果となったことでドル売りが加速。一時1.1893と1.19に迫る動きとなった。ユーロ/円は当初ドル/円の下げに130円を割れたものの、その後は130円半ばまで上昇。30日は前日からのドル売りの流れを継続し、ユーロ圏2QGDP速報値が市場予想を上回る結果となったことも好感され1.1909と約1ヶ月ぶりの高値水準まで上昇する場面があった。しかしロンドンフィキシングにかけては月末ドル買いのフローもありその後は上値重く、1.1867で越週。ユーロ/円はクロスの上昇に130円台前半から130.50円まで上昇後反落し、130.13円で越週。

今週のユーロは上値の重い展開予想。先週は、7/22のECBにおけるインフレ目標変更等に加え、株式市場の下落を背景としたリスクオフからユーロ売り優勢でスタートするも、パウエル議長のハト派寄りともとれる発言にドル売りが強まりユーロが巻き返す動きとなった。もっとも、依然として欧米の金融政策正常化に向けたｽﾀﾝｽの乖離感からユーロ上値は抑えられるものと予想。先週のFOMCでは着実な経済回復を確認しつつも、慎重姿勢を崩さないパウエル議長発言により過度な期待感を抑制、大方の市場予想通り無難な結果となった。Fed内でも意見が別れるなど高まる市場関心に対し、テーパリングを先延ばしにする理由を探す米国と、今年に入りむしろPEPPにおける買入ペース増を見込むなど一貫して緩和維持の欧州のスタンス乖離は明確であり、再び1.18を割り込むような展開も想定しておきたい。今週の主な経済指標としては2日（月）ユーロ圏7月HICP速報値、3日（火）ユーロ圏6月PPI、4日（水）ユーロ圏6月小売売上高、また週末には米7月雇用統計等を予定。足元ワクチン接種のペースに頭打ち感とデルタ株の拡大により、ユーロ圏経済指標が前回比下振れることがあればさらなる下押し圧力も予想され注意したいところ。

(3)先週までの相場の推移

先週（7/26～7/30）の値動き:　（対ドル）安値　1.1764　高値　1.1909　終値　1.1867
（対円）　安値　129.55　高値　130.55　終値　130.13



（資料）ブルームバーグ

3. 英ポンド

欧州資金部　本多 秀俊

(1)今週の予想レンジ:　1.3800　～　1.3980　　151.20　～　153.40　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

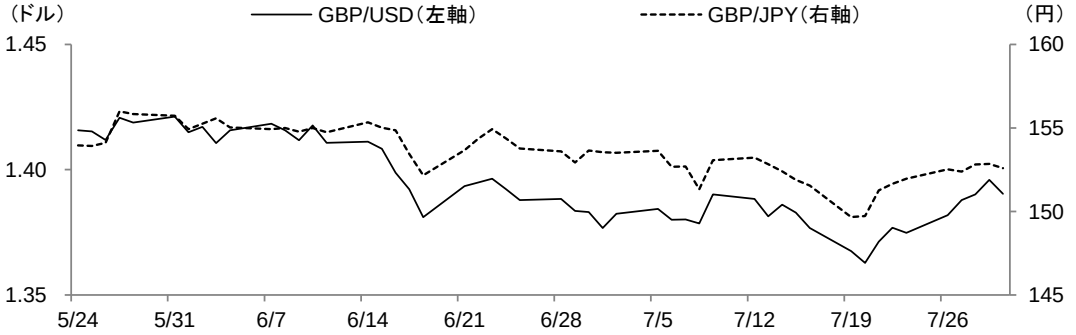
先週の英ポンド相場は、明確に上昇。ただし、ポンド高の要因ははっきりしなかった。対ドルでの上昇幅(安値→高値で+1.79%)との比較で、対ユーロ(同+0.86%)、対円(同+1.35%)のそれが小幅にとどまった事実は、ポンド上昇に見えた値動きの少なからぬ部分がドル安の結果であった可能性を示唆していた。ドル安の要因としては、28日の米連銀公開市場委員会後のパウエル議長発言が「予想されたほど金融緩和撤回(=金融引き締め)に積極的ではなかった」と受け止められたことや、29日に発表された米4～6月期GDP速報値が市場予想を明確に下振れたことなど、わかりやすい要因を指摘することができた。一方で、その幅の大小こそあれ、ポンドが主要通貨に対して全面高に振れたのは事実で、そこになんらかのポンド押し上げ要因の存在を想定するのは不自然なことではなかっただろう。しかし、残念ながらそれらしい要因を見つけることはできなかった。27日に前後して、市場の一部に「英中銀は来年8月にも利上げに着手する」と、利上げ開始時期の予想を前倒しする声が聞かれたが、こうした思惑がどこまでポンドの値動きに影響したかを定量的に測るのは難しかった。そうした市場の側の思惑よりも、英中銀金融政策委員会ブリハ委員が、26日、「金融緩和を縮小する動きには賛同できない」「少なくとも今後数四半期、おそらくはそれ以上、現在の(緩和的な)金融政策を維持することが適切だろう」などと述べたことの方が、材料としては余程重みがあったはずだが、同委員の発言にポンドが反応を示した様子はほとんど読み取れなかった。

今週の英ポンド相場は、軟調気味の膠着を予想。膠着を予想するのは、先週のポンド堅調の要因が判然としないまま次の方向感を占うような作業に、そもそも意味があるとは思えないから。ポンド軟調を中心に見込むのは、対ドルの1.40、対ユーロの0.85といった節目となる水準を、特段のポンド押し上げ要因も見当たらないまま、あっさり上抜けていく展開を想定し難いから。仮に値幅が出るなら、上値を押さえられた挙句の調整安の方が見込み易いということに過ぎない。注目要因として、5日(木)に結果が発表される英中銀金融政策委員会や、6日(金)の米7月雇用統計を挙げることはできるものの、正直、何が期待されているのかもよくわからないし、どのような結果に、どのような反応を想定すべきといった市場の合意が、現在までに形成されているとも思えない。勿論、金融緩和縮小(金融引き締め)に積極的な英中銀はポンド買いだろうし、強い米雇用統計はドル買い、その逆も真なりだろうが、市場参加者の読みがすっきり一致するようなわかり易い結果が得られる可能性は高くないだろう。実際、先週の米連銀公開市場委員会や米4～6月GDPに対する反応にしても、市場は、読みたい内容を読みたいように読んだだけの感が拭えなかった。例えば、米GDPの下振れに対し、市場は「金融引き締め先延ばしの可能性」を好感したようだが、景気の伸び悩みを株式市場や商品市場が好感するなどそもそも筋が通らない話ではなかったか。また、当該指数の個人消費や価格指数は明確なインフレ圧力の高まりを示していたが、誰もそれを金融引き締め圧力とは受け止めなかったというのも、市場の強い恣意を感じさせた一例と言えただろう。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/26～7/30)の値動き:

(対ドル)	安値 1.3737	高値 1.3983	終値 1.3896
(対円)	安値 151.41	高値 153.44	終値 152.59



(資料)ブルームバーグ

4．豪ドル

市場営業部　為替営業第二チーム　尾身　友花

(1)今週の予想レンジ:　0.7200　～ 0.7400　　79.50　～　81.50　円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

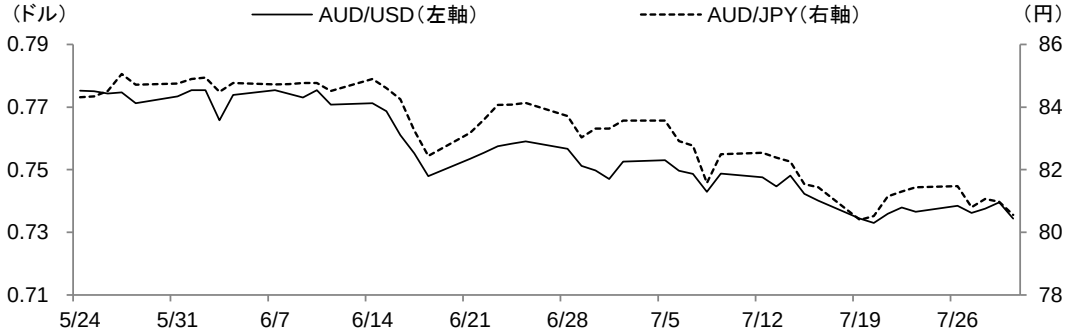
先週の豪ドルは下落。26日の豪ドルは0.7370近辺で取引開始後、米株先物が売り戻される中、上値の重い展開に。中国当局が学習塾などの学習支援サービスを手掛ける企業に非営利団体への転換を求め、増資や株式公開を禁止するとのヘッドラインに加え、中国人民銀行が金融機関に対して過熱する住宅市場を抑制する為住宅ローン引き上げを命じたとの報道を受けて中国株が大幅下落。こちらも豪ドルの重しとなった。NY市場時間に入り、特段の材料が無い中で米ドル売りの流れが強まると豪ドルは0.7380台まで上昇して引けた。27日は、米株先物が下落に転じる中、軟調に推移。鉄鉱石価格や中国株の続落も重しとなり、アジア時間午後には下落幅を拡大し、一時0.7338を付けた。NY時間に発表された米7月コンファレンスボード消費者信頼感指数が予想を大きく上回る結果となり(市場は前月比低下を予想)、株価が上昇に転じると、豪ドルも買いが優勢となり0.7360近辺まで戻した。28日は、豪Q2CPIが予想比強い結果となったことを受けて瞬間的に0.7375近辺まで上昇したがすぐに反落。シドニーロックダウンの延長決定が重しとなり、その後もじりじりと軟調に推移した。FOMCでは声明文で「経済は雇用の最大化と物価の安定化に向けて進展した」との見方が示され、米ドル買いの反応から豪ドルは一時0.7317まで下落。その後、パウエルFRB議長の記者会見で「利上げからは程遠い」との発言を受けて、米ドル売り戻し、豪ドルは0.7380近辺まで上昇した。29日は、一旦前日安値の0.7360付近まで下落した後、徐々に買いが優勢な展開に。前日のFOMCにてパウエルFRB議長が「利上げ検討は程遠い」との認識を示したことで、米ドル安の流れが継続、豪ドルのサポート材料となった。NY時間に発表された米Q2GDP(速報値)は予想を大幅に下回る結果に、又同時に発表された米新規失業保険申請件数も予想をやや上回り、米ドルは更に売り進まれた。豪ドルは一時0.7413近辺まで上昇した後、0.74エリアで引けた。30日は、シドニーにおけるコロナ新規感染者数の増加が嫌気されるなど、豪ドルは反落。一時的0.73台前半まで下落した後、0.73台半ば付近でクローズした。

今週の豪ドル相場は上値重く推移すると予想する。理由はコロナ感染者拡大による経済回復の遅れが懸念されると考えている。先週は、米金融緩和の長期化を受けたドル売りなどを受けて、豪ドルは一時0.74台まで買い戻される場面も見られた。また、7月に豪RBAは昨今の経済回復を受けて、9月から債券買い入れペースの縮小を決定していた。しかし、足元コロナ感染者の拡大がみられており、豪ドルに対するセンチメントが悪化している。ワクチン接種の遅れも目立っており経済回復の見通しに不透明感が強まっている。今週は、3日(火)に豪RBAが予定されているが、9月からの債券買い入れ縮小の延期も囁かれる。先週発表されたインフレ指標は予想を上回る中、どのような金融政策決定を行うのか注目しているが、さらなる引き締めを決定する可能性は、足元の感染状況に鑑みると低そうだ。

(3)先週までの相場の推移

先週(7/26～7/30)の値動き:　(対ドル) 安値 0.7317　高値 0.7413　終値 0.7347

(対円) 安値 80.45　高値 81.52　終値 80.56



(資料)ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。